

社会科成立期における歴史教科書の作成と 4つの歴史教育論（Ⅲ）

梅野正信*

(1997年10月13日 受理)

A Study of the History Textbook on the Social Studies after World War II (Ⅲ)

Masanobu UMENO*

1. 3つの時期区分と4つの歴史教育論

- (1) はじめに
- (2) 国家志向型歴史教育から事実志向型歴史教育へ
- (3) 変革志向型歴史教育および生活志向型歴史教育からの『くにのあゆみ』批判
- (4) 歴史教育と社会科との接点
- (5) 総括

*以上 梅野正信「社会科成立期における歴史教科書の作成と4つの歴史教育（Ⅰ）」（『鹿児島大学教育学部実践研究紀要』第5巻 1995.11）

2. 国家志向型歴史教育の系譜と特色

- (1) はじめに
- (2) 敗戦と歴史教育
- (3) 『暫定初等科國史』の編纂と国家志向型歴史教育
- (4) 歴史科専門委員会と歴史教育研究会
- (5) 戦前における歴史教育研究会と『研究評論歴史教育』
- (6) 戦後における歴史教育研究会と『歴史教育』
- (7) 国家志向型歴史教育の特色

*以上 梅野正信「社会科成立期における歴史教科書の作成と4つの歴史教育（Ⅱ）」（『鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編』第47巻 1996.3）

以下本号

3. 社会科成立期における歴史教育論

—歴史教育の相互関係を中心に—

(1) 本研究の目的

本研究主題については、これまで、社会科成立期の歴史教育論を、国家志向型歴史教育、変革志向型歴史教育、事実志向型歴史教育、生活志向型歴史教育の4つに分類し、このうち、国家志向型歴史教育について、戦前からの歴史教育論の特色を中心に考察を加えてきた。¹⁾

この、社会科成立期の歴史教育を大きく4つの歴史教育論の対立と共同の過程の中で展開されたものとして位置付ける研究視角は、これにより、これまでの多くの歴史教育史の叙述のように一つの立場から単線的に他を論じるのではなく、各々の歴史教育論が、複線的・並列的に併存していた事実を資料にそって明らかにすることを可能とした。本論では、これまでの研究成果をふまえ、敗戦後、社会科成立期を対象に、生活志向型歴史教育を除く3つの各歴史教育を代弁する諸論の抽出と比較、および各歴史教育相互の関係を中心として比較・検討したい。

<社会科成立期における4つの歴史教育の相互関係(概観)>

	45.10.22 渡辺義通, 石母田正, 林基の三氏がH・E・NormanとJ・K・Emersonとの会談で平泉澄, 板澤武雄, 西田直二郎を反動的研究者として批判
	45.11.10. 12.1 歴史学研究会(国史教育再検討座談会)
	45.12~46.5 『暫定初等科国史』の作成 *4つの歴史教育に分類する視点については, 拙稿「社会科成立期における歴史教科書の作成と4つの歴史教育(I)」 *国家志向型歴史教育の系譜については拙稿「社会科成立期における歴史教科書の作成と4つの歴史教育(II)」
	46.5~46.9 『くにのあゆみ』の作成
	<46.1 民科創設> 46.5 日本史研究発刊 46.6 歴史学研究会発刊

46. 6 井上清（平泉澄，山田孝雄，徳富蘇峰，秋山謙蔵，望月健夫，西田直二郎，板澤武雄らを軍国主義化の最も露骨な犯罪人として批判。ほかに安倍文相，高坂正顕，土屋喬雄を批判）
46. 8 井上清（黒澤得男らの「皇室中心主義史観」を「革命恐怖史観，反革命史観」と批判）
- <46.10 民科歴史部会『歴史評論』創刊>

46. 11~48 『あたらしい日本の歴史』の作成

- 46.11.13 家永三郎（羽仁五郎を批判）
47. 高橋磯一（西田直二郎，丸山国雄，土屋喬雄を反動的歴史家として，中村孝也，丸山二郎，家永三郎を旧史観として批判）
47. 1 『国民の歴史』発刊
47. 3 井上清，羽仁五郎，藤間正大，小池喜孝らによる『くにのあゆみ』（大久保・岡田）批判

47. 5. 5 学習指導要領社会科編（試案）

46. 6 林望『くにのあゆみ』等を批判
47. 7. 5 文部省の勝田守一，豊田武，塩田嵩，宮下三七男ら民俗学研究所で柳田国男
48. 7. 12 和歌森太郎，直江広治らと懇談
- *民族学と社会科歴史との接点について考察したものとしては拙稿「社会科歴史論の歴史的研究」『上越社会研究』第1号 1986年 10月，および，拙稿「戦後の歴史教育と社会科教育」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』40巻 1989年 3月
47. 9 日本史研究『くにのあゆみ』* 批判

47.11~49. 2 中等国史教科書編纂委員会

*拙稿「中等国史教科書編纂委員会の歴史的研究」（研究ノート）『社会科教育研究』70号 日本社会科教育学会 1994年 3月

- 47.12.10 和歌森太郎（書評で唯物史観を批判）
48. 3. 15 家永三郎（唯物史観を批判，津田に共鳴）
48. 5. 20 伊豆公夫（家永への反批判）
48. 6 検定受付 国史を除外

48. 9	松島栄一と和歌森太郎との民俗学をめぐる往復書簡
49. 2	国史の教科書の要件 (文部省)
1949. 4	高等学校社会科日本史・世界史の学習指導について (文部省)
49. 2	中等国史教科書編纂委員会 原稿を確認
49. 7	歴研・民科『日本の歴史』一般書として発刊
50.	和歌森太郎『日本の成長』使用許可
	*三つの日本史を考察したものとして拙稿「GHQ占領政策後期における日本史教科書」『史潮』新35号 歴史学会 弘文堂 1994年6月
	*『日本の成長』に限定して考察したものとして拙稿「初発期における『社会科歴史』教科書の具体的分析」『社会科研究』第37号 全国社会科教育学会 1989年3月
49. 6	井上清報告「歴史教育と社会科」への家永三郎, 今井登志喜の批判
<49. 7	歴教協創立>
49. 11	『くにのあゆみ』一冊に合本
50. 3	小西四郎 (書評で和歌森に理解を示す。)
50. 1. 25	松島栄一 (和歌森の著書を「試験管の中でみた日本史」と批判)
50. 2. 28	長谷川浩司 (和歌森太郎の著書を批判)
50. 1. 20	岡田章雄 (書評で高橋碩一を批判。和歌森太郎に理解を示す。)
51. 10	野井康輔 (和歌森を反動勢力への迎合と批判)
51. 12. 5	中学校高等学校学習指導要領 社会科編Ⅰ <中等社会科とその指導法> (試案)
52. 3. 20	中学校・高等学校学習指導要領 社会科編Ⅲ (a)日本史(b)世界史 (試案)
	*1947年度版と1951年度版学習指導要領の一般社会科における歴史学習を比較・考察したものとして拙稿「初期社会科における新制中学校『一般社会科』の歴史学習」『社会系教科教育の理論と実践』清水書院 1995年3月
52	三島一 (土屋喬雄を批判)
53	松島栄一 (書評で和歌森を「権力の側にたっている」と批判)
53	矢野實 (和歌森を「一見良心的な態度に偽装されている危険な考え方」と批判)

<53. 9『歴史教育』復刊>

53. 9 津田左右吉の歴史教育観めぐる論評
名越時正（社会科歴史の時代区分を「共産主義社会の革命のための」ものと批判）
森田康之助（社会科歴史の時代区分を唯物史観と批判）
井上光貞（津田の歴史観を批判）
- 53.10 つださうきち（「人類に共通な生活の発展段階」や「法則」を批判）
- 53.11 滝川政二郎（社会科歴史の時代区分を「必然的に社会主義時代」を構想するものとして批判。）
54. 家永三郎（雑誌『歴史教育』の再刊を「狂信的日本主義史学の再建」「ファシズム史学復活の機運」と批判）
- 54.11 渡部康彦（雑誌『歴史教育』を批判）

*1950年前後の歴史教育独立論の時期における「生活志向」型歴史教育の特色については拙稿「歴史教育独立論と『社会科歴史』論」『史潮』新22号 歴史学会 弘文堂 1987年11月

(2) 『くのあゆみ』『あたらしい日本の歴史』の発刊をめぐる時期

『くのあゆみ』と『くのあゆみ批判』について、これまでの研究においては、主に変革志向型歴史教育の立場から概観されたものが多い。²⁾

これに対して、本論は、これを多様な歴史教育論の併存、並立として整理するものである。しかしながら、ここで分類した4つの歴史教育の各々について、特定の団体の全体、特定の雑誌の全論述、特定の個人の全ての業績を一括して位置づけることは、本論では、していない。

そのスタンスや位置関係は、当然のことながら時間的に変化する側面がみられるからである。

本考察の中で個人の立場を固定化して論じていないのは、このことによる。

ここでは、家永三郎の事例を紹介しておきたい。

家永三郎は、家永訴訟を通じ、一貫して、その民衆史観を実証主義の側から徹底させた立場にあると理解されることが多い。その意味で、後年、家永が『くのあゆみ』執筆当時を振り返った次の回想は、前述した脈絡の中で抵抗無く受け入れられてきた。³⁾

〔家永三郎「戦後史における教科書裁判」(1976)〕³⁾

「わたくしに与えられたのは古代の部分だけであつたのでありますけれども、歴史教科書の巻頭から神代の物語、神武天皇以後十数代の物語を抹殺することに大きな使命感を感じたのであります。」

しかし、当時、高橋磯一が、家永をして、変革志向型歴史教育の側からの批判に「ただ一人あくまで戦闘的に反批判を展開したのは家永三郎氏であった。」と指摘されたことの実態もまた、以下に確認することができるのである。⁴⁾

〔家永三郎「『くにのあゆみ』理解のために」(1946)〕⁵⁾

「神武というのは平安時代に贈られた諡号で漢風であり、むしろ古い日本風の称号すめらみことを示したかったからである。」

「南朝を正統にすることにおいては今日殆ど異論がない」

「羽仁氏の研究は概してひとつのイデオロギーが濃厚に出すぎてどうかと思ふ。」

〔家永三郎「警戒すべき非実証論」(1948)〕⁶⁾

「エンゲルスの図式によって日本の古代社会を解明しようとする要請が一切を決定しているように見えるからである。(略) モルガンの先入主を以て事実を解釈しようとする傾向こそ、実証を生命とする史家の深く戒しむべき処とせねばならぬ。」

「(津田左右吉『日本上代史の研究』の刊行は) かくの如き傾向に対する適切なけん制力としての重任をになうに至った。」

以上、家永の歴史教育への言及は、前者においては、南朝正統論をひきずったまま羽仁批判をなすものであり、後者の、1948年時点にあっても、変革志向型歴史教育へのあからさまな不信と津田左右吉への共感を表明するものであることがわかる。

家永の例をとっても、一人の思想、一つの団体、一つの研究誌を、それぞれ固定化して論じることは、適切ではないと思われるのである。

1) 国家志向型歴史教育から事実志向型歴史教育へ、両者の並立と併存

周知の如く、『暫定初等科国史』は、1946年5月の豊田武とトレーナーとの間の会談で編纂作業の中止が決まり、その後、丸山国雄のもとで、新委員による戦後初めての新しい国定教科書が、国民学校用、中学校用、師範学校用にわけて企画、編纂された。このうち、国民学校用の新国定教科書『くにのあゆみ』は、1946年9月に発行されることになる。

『くにのあゆみ』の編纂については、まずもって、次に示されるような、編纂にあたっての基本的視点が指示された。

〔家永三郎「戦後の歴史教育」(1963)〕⁷⁾

(一)国家権力の欲するようなイデオロギーを注入するための歴史教育ではなく、歴史学の科学的研究に立脚した事実に基づく歴史教育となったこと。

- (二)したがって客観的史実と認めがたい神話・伝説の類の、史実であるかのような取り扱いが全廃されたこと。
- (三)歴史が政治権力者を中心に展開するかのように理解させる恐れが多かった教材選択のかたよりが改められ、社会経済史や文化史の学習に力が注がれるようになったこと。民衆の生活の歴史が大幅に歴史学習のうちに入ってきたこと。
- (四)歴史を社会発展のプロセスとしてとらえる見かたが強くなり、各発展段階の特色を学ぶのに留意されるにいたったこと。
- (五)皇室関係の史実を客観的に取り扱いうるようになったこと。
- (六)紛争に対する批判的な取り扱いが可能になったこと。
- (七)反体制思想・反体制運動（反戦平和の動きを含む）の歴史が歴史教育の中で大きな位置を占めるようになったこと。

これに加え、さらに、家永自身による次のような評価が与えられるのだが、これについては、変革志向型歴史教育の側から、「実証史学」の限界として位置づけられることになった。

〔家永三郎「くにのあゆみ」編纂始末（1956）〕⁸⁾

- (イ) 皇位世襲の伝統を説明する文章は削除させられた。
- (ロ) 神道に関する事項はいっさい記述することが許されなかった。
- (ハ) ひとり神道ばかりでなく、占領軍は宗教に対して極度に神経質で、仏教でもキリスト教でも、教義の内容に立ち入った記述は歴史教育の範囲外とされた。
- (ニ) 昔からの教科書には、感情的な、価値評価的な、乃至全称判断的な修飾句や形容句が無造作に使用されて来た。(中略)一切の主観的語句の抹殺された、淡々と客観的事実の叙述に終始した文章ができ上がったのである。

〔松島栄一「戦後における文教政策の変質過程」(1963)〕⁹⁾

「執筆の委員は、実証史学の研究において業績のある人びとではあったが、実際に教育上の経験をもっていなかったことが、この『くにのあゆみ』の性格の曖昧さ、妥協的表現となっていったわけであろう。」

他方、国家志向型歴史教育を形成していた論理は、『暫定初等科国史』編纂作業中断の後も、依然として、歴史教育の底流を形成していた。この立場の特色は、『くにのあゆみ』の編纂責任者丸山国雄の次の発言によく表われている。

〔丸山国雄『新国史の教育—くにのあゆみについて—』(1947)〕¹⁰⁾

「国体は我が国の歴史の所産である。(略)国史に一貫せる精神の真髓に触

れると共に国民生活の実相を解明するところに、その歴史的使命を有するものである」

「紀年を正確に決定することは、学術研究の便に供するものであって、現在使用されている皇歴を廃するものでないという考えは妥当である。」

「皇室の御祖先のさる御方が我が国の統一に着手され、その御方を後世神武天皇と申し上げるに至ったことは事実である。」

「神功皇后が架空の人物であらせられるということにはならない。初等科ではこのことに触れる必要もないが教育者として一応その経緯を心得ておく必要があるであろう。」

「南朝の顯臣は終始一貫その節を曲げなかった。中でも北畠親房の烈々たる精神は、常に忠臣の志気を鼓舞し、大節を完うせしめた。」

「京都と吉野の対立が対等でないことを思い致すと共に順逆に基く極端なる批判的言説に考慮を払い」

「吉野朝廷が正統であることを述べ、強いて南朝という語を使用する必要もない。」

「足利尊氏が後醍醐天皇から尊の一字を賜ったことは、単なる恩賞の思召であって当時の政情から武士力第一等となされたために過ぎない。これを以て心から尊氏を信頼遊ばされたとの解釋は下し得ない。」

「皇室中心主義が天下統一の基調となったことは注目すべき事柄である。信長・秀吉の偉業もかかる風潮と相関連して特記せらるべきである。」

また、編纂委員を務めた宮下三七男の論説の中にも、同様の視点を確認することが出来る。

〔宮下三七男「新歴史教科書の編纂趣旨と取扱」(1946)〕¹¹⁾

「皇紀二千六百年は民族的信念にもとづくものであって、皇紀を変更しようといふのではなく、正確でなくまた明らかでないものを教科書の立場として取らないだけのことである。」

「所謂北朝の主を天皇と申上げることは皇室の思召であり、皇統譜令、皇室陵墓令に於いて、共に天皇として、北朝を偽朝とはされていない。」

「あの楠正成が吉野の朝廷に対して率先難に赴き、一身を犠牲にして忠節をはげんだ行動は、あくまでも崇敬さるべきもので、かうした人格に対して後世楠公崇拜のことが起ってくるのも偶然ではない。」

以上、ここには、南朝正統論さえもそのままの戦前型天皇中心史観の継承を確認することができよう。

他方、このような潮流とは距離を置く形で、事実志向型歴史教育の立場が、主に『くにのあゆみ』の編纂主旨を基調として、執筆者当人たちによって表明されていく。

〔座談会「終戦後十一年を顧みて」(1956)〕¹²⁾

岡田章雄「明治天皇が新政の方針を神に誓ったというところも、五箇条の御誓文のところだが、あそこも、神にという二字が構成で削られている。」

〔座談会「戦後の高校日本史教育の歩み」(1978)〕¹³⁾

岡田章雄「一番私の印象に残っているのは、『南京を占領した』と書いてあったところを、『南京を荒した』と書けというのですね。ところが、アメリカ側はそれを強調させたい、だから『南京を荒し』という語句を入れさせた。また、『宣戦布告をしないでハワイを攻撃した』という文章の『宣戦布告をしないで』をわざわざ加えさせた。日本人は、なかなかそういうことを積極的に書かないのですが、アメリカ側の示唆でとくに書かされたのです。」

また、次にあるように、主に変革志向型歴史教育との緊張関係を意識した発言もみられていた。

〔森末義彰「書評欄」(1947)〕¹⁴⁾

「軍国主義あるひは国家主義的見地でまげられることのない日本の歴史、共産主義的見地や民主主義的見地だけにとらはれない日本の歴史。日本の歴史的事実の上に立つ歴史の流れがこれまでの歴史にも、常に強く自分の主張を操ってゐたのである。この政治的な主義や主張を以てしても、そう簡単に曲げられなかった眞実の流れが、表面に流れ出すだけなのである。」

〔座談会「くにのあゆみの研究」(1947)〕¹⁵⁾

小池喜孝「歴史教育も今まで以上に子供達の政治的教育面に触れてこない限り、児童の生活環境に合致させるということは成り立たないんじゃないんでしょうか。」

岡田章雄「僕はそう考えないんです。あなたは児童の生活というものをあまりに政治的に考えすぎるのではないのでしょうか。」

「右へ歩いてゆくのか左に歩いてゆくのかという問題じゃなくて、児童に歩き方を教える。生活の技術を教える。そういうものに歴史教育がなってゆかなくてはいけないのじゃないんでしょうか。」

岡田章雄「歴史教育も、歴史的な客観的なものの見方というものを養う学科、社会現象の中にそれを見る見方を養う学科にすべきじゃないかと思えますがね。」

大久保利謙「教科書としては問題をあまり断定的に書くのはどうかと考えた。それについていろいろ意見もあろうが、この問題にかぎらずすべて現在まだ、議論となってゐる問題をすぐに公式的に書きちゃうのはどうかと思った。」

他方で、1946年の暮れには、『くにのあゆみ』の副読本として企図された『新しい日本の歴史』の発刊がはじまった。¹⁶⁾

〔『新しい日本の歴史』(第一巻～第六巻)の主な執筆者名〕

家永三郎, 和歌森太郎, 後藤守一, 駒井和愛, 齋藤忠, 杉原荘介, 塩田崇, 遠藤元男, 森末義彰, 村田正志, 遠山茂樹, 小西四郎, 深谷博治

上に示した主な執筆者からは、本書が、少くとも、人的には4つの歴史教育の併存・並立の形をとっていたことがわかるのだが、実際には、次に示す家永の記述にみられるような、庶民生活史の叙述がみられる反面、齋藤の記述にみる如く、¹⁸⁾ 国家志向型歴史教育の特性が強く出ている箇所もまた、確認されるのである。

〔家永三郎「聖徳太子」他(1946)〕¹⁷⁾

(奈良の都)

「はなやかな文化のすすんだ暮らしをしてみたのは、やはり朝廷や朝廷に関係のある貴族達だけで、一般の人民には行きあたりませんでした。奈良ではかはらぶきの家でりっぱな道具を用いた生活が営まれても、田舎では椎の木葺の葦をもって食べてゐたといふ大昔のやうなくらしがいまだにつづいてゐたのであります。」

〔齋藤忠「大和の朝廷」(1946)〕¹⁸⁾

「大和朝廷の力の及んだ地域は神武天皇以来だんだんとひろげられ(略)それが崇神天皇の代になって、急に広まったものとおもはれます。」

「崇神天皇以来次第に発展してきた大和朝廷は、景行天皇のとき国家の統一がほぼできあがり、第十三代成務天皇の代となって、その制度がととのふこととなったのです。まず、天皇は武内宿禰(たけのうちのすくね)を大臣としました。これは我が国の大臣のはじめです。」

「百済、新羅、任那王国は、我が国の力によって平和が保たれることになりました。」

林基によれば、『新しい日本の歴史』は、「実際は文部省図書編修官豊田武、教科書局杉原荘介両氏の編輯したもの」で、新聞連載では「反民主的超国家主義者として定評ありやがて事実公職追放

処分にあった肥後和男氏に執筆せしめ、2、3回にして命令によって連載不可能となった」のだという。さらに、「古代日本に於ける国家の成立」は、新聞では松島栄一が書いたが、単行本では「序説的部分だけが再録され」て「本編の部分は全部削除」され、これに代えて齋藤忠によって書かれた部分は「殆んど全部記紀の伝説の抄出でもって大和朝廷の歴史を語っている」というのだ。¹⁹⁾

林は、「文部省は、学界が否定し、且つ、『くにのあゆみ』では削除されている五世紀頃以前の皇室関係の伝説を、松島氏の原稿を没にして文部省嘱託齋藤忠氏を起用することによって、蘇生せしめたの」だと強く非難し、「毎日新聞社に良心があるならば、一日も早く本書を絶版にするべきであるし、世の父兄も児童にこの本を手にするのを拒否すべきである。」と弾劾した。²⁰⁾

2) 変革志向型歴史教育の戦後における活動再開

前節にみた、国家志向型歴史教育や事実志向型歴史教育の動向に対して、これに正面から対抗する立場に立つ変革志向型歴史教育は、戦後の歴史教育を主導する企図をもって、1945年11月10日と12月1日の二回、「国史教育再検討座談会」を開催した。²¹⁾

ここには、「民族全体の、すなはち人民大衆のための歴史の教育でなければならない。今迄の歴史教育が如何に封建的軍國主義的支配の支柱となってゐたかを考へる時、いはゆる歴史的常識の徹底的破壊を恐れてはならない。」(11.10)と、戦後の新しい歴史教育の構築を表明するものから、「社会構成を基礎にして時代区分を根本的に改変すること」や「教科書の開巻第一頁が神話から始まってゐることの誤りになる」こと、また、「世界史的視点に立つ人類学・考古学の成果より出発し、古代人も生活を生々と描き出すべきこと」など、具体的記述の視点についてまで、参会者一同の意見が一致したとされている。(12.1)

この座談会については、田中武雄が、「当時の時代状況と課題（たとえば天皇制問題）の中でとらえたとき、批判の持つ意味をたんなる“イデオロギー主義”におわらせることができない」²²⁾と位置づけているが、本論では、田中の指摘の主旨を理解しつつ、なお、加藤章の「歴史学から切りはなされた歴史教育がもたらした弊害を厳しく反省するものであったが、歴史教育の問題を実践から浮き上がった理論闘争に導く契機ともなったことは認めなければならない」との指摘を、まずもって検証していきたい。²³⁾

加藤の指摘にある如く、この立場の歴史教育論の特徴は、科学的歴史学の確立を標榜しつつ²⁴⁾、当初、次の二つの目的を持って、その主張を展開していた。

一つは、戦時期において皇国史観を担ったイデオロギーの犯罪性を厳しく追究する立場であり、いま一つは、「変革」や「革命」の達成を目的とする歴史教育を追求する立場である。そこでは、歴史研究者や歴史教育者の政治的姿勢こそが、まずもって問われることになっていたのである。

第一の点については、すでに、「国史教育再検討座談会」の直前、1945年の10月22日に、渡辺義通、石母田正、林基の三氏がGHQにH. E. Norman, J. K. Emersonをたずねた、「日本史の科学的

研究」についての会談記録の中にみることができる。²⁵⁾

三氏は、東京帝大教授の平泉澄を、軍部と緊密な関係にあった国家主義的歴史解釈の熱狂的主導者であったとし、他にも辻善之助（帝国学士院会員）、板澤武雄（東京帝大歴史科教授）、西田直二郎（京都帝大・文学部教授）らの名をあげて非難した。

三人は Norman や Emerson に対して、自分たちが「長い間日本政府に意図的に育まれてきた、天皇は神の起源をもつとか、日本の政治制度は唯一無比に高貴であるといった国家主義的歴史解釈の訂正を企図していると述べ、日本史を完全に書き換える計画」を持つものであると伝えているのである。

この C I E への告発をはじめとして、つぎのような戦犯告発型論究が続くことになる。

〔井上清「時評」(1946)〕²⁶⁾

「平泉澄、山田孝雄、徳富蘇峰、秋山謙蔵らのごとく、軍閥官僚の拡声器となって国体護持の強制のために、大日本皇国は神国となりと唱へ、皇国は世界を支配する－八紘一字－神命を持つと称し、ひたすら人民を天皇制軍閥官僚の奴隷とし、侵略戦争に駆り立てるために、科学の片鱗をも歴史学から取り去った最も露骨な犯罪人ども」

「水戸の高等学校で生徒から軍国主義・極端な国家主義教授として批判された望月健夫」

「教学錬成所の所員で、文部省の諸学振興委員会の委員として歴史の歪曲を担当した西田正二郎」

「戦争中に平泉の下で、東大教授又は助教授として『天攘無窮史観』を唱へて神国主義を宣傳し、『天攘無窮の生命観』が日本民族の死生観なりと称して日本の青年学生が軍閥の竹槍主義・特攻主義戦術－これをもし戦術といえるなら－の犠牲に死ぬることを煽仰し（「肇國精神」昭和18年6月号）、南進論＝南洋侵略を放送や文書で宣傳し続けた板澤武雄」

「(高坂正顕の世界史は)国家史観しかも帝国主義国家史観にはかならなくなる。」

「(土屋喬雄のように)戦争中に軍閥官僚財閥に阿諛して学問を歪めたものが、今急に民主主義的装ひで新しい歴史学を唱へんとしても、彼が過去の罪業を率直に自己批判して出直さない限りは、新しい歴史学をうち立て得るものではない。」

〔高橋碩一「くにのあゆみをめぐって」(1947)〕²⁷⁾

「かつての『国民精神文化』の西田直二郎氏が『国史教育の課題』(潮流二月)を、また、文部省から追放された丸山国雄氏が、『歴史教育の方針』(国民の歴史)を書いても民衆は横を向くばかりであり、かつての『国防

国家論』、土屋喬雄氏の『日本史再建の具体的方針』（世界四月 潮流二月）もその『経済史』家的ギルド根性は井上清氏をはじめとする進歩的歴史家の指摘するところとなった。」

国家志向型歴史教育に加え、柳田国男についても、「『現在のものが決して最上のものではないという断定は学問の未来に希望をもつ事なのであり、決して悲しむべきことではない』（柳田国男「歴史教育の使命—くにのあゆみに寄す」毎日新聞）などと傍観することはゆるされぬであろう。」と、その非政治性に対して、高橋碩一から厳しく論難されることになる。²⁸⁾

いま一つの、第二の視点、「変革」や「革命」を直接的に志向する傾向については、井上や藤谷の次の記述の中に、うかがうことができる。

〔井上清「歴史教育について」（1946）〕²⁹⁾

「歴史的必然性をもっとよく見通し、その学問的見通しに立って、革命を恐怖するのではなくしてそれを鼓舞するものでなくてはならぬ。（中略）革命の火の中から生まれ、その歴史解釈、歴史的見通しの正しさが、すでに革命の試練に耐え、最近百年の世界史の発展そのものによって立證されている、革命的プロレタリアートの歴史理論に基づくものであろう。」

〔藤谷俊雄「歴史教育と歴史観」（1947）〕³⁰⁾

「歴史教育の基礎となるべき歴史観はプロレタリア階級の立場に立つ歴史観でなくてはならないのである。」

この視点では、教育者の側からも、阿部眞琴の「われわのいう政治史は、はたらく人民が生活をつくり、たちあがっていく、支配者がそれをおさめ、対立している、そのような過程をいうのである。」「資本主義社会はその対立物たる無産階級がたちあがって、はじめてその本質がばくろされたのである。」といった発言などがみられていた。³¹⁾

総じて、敗戦から1947年にかけての時期、変革志向型歴史教育の主張は、その特色として、科学的歴史学の立場に立った歴史教育の確立、守旧的歴史教育論への戦犯追及型批判、社会主義革命のための歴史教育の提唱、といった三つの柱を持っていたことがわかる。

3) くにのあゆみ批判

敗戦直後からの、変革志向型歴史教育によって開始された活発な動勢にもかかわらず、国定教科書の編纂作業は、現実には、国家志向型歴史教育や事実志向型歴史教育によってすすめられていた。したがって、変革志向型歴史教育の歴史教育内容については、教科書編纂作業の外側から、すなわ

ち、『くにのあゆみ』や『あたらしい日本の歴史』に対する批判の形をとって、展開されることになった。

その主な論点を、『くにのあゆみ』の記述に即して批判を展開した、次の二つの論考からみてみたい。

〔井上清『くにのあゆみ批判－正しい日本歴史－』（1947）³²⁾〕

「『くにのあゆみ』はいつ神日本磐余彦天皇が即位したか、いつ大和朝廷が全国を支配したか、古墳がいつごろのものか、これらについて全く年代を記さない。年代を書くと紀元節とか2600年とかのいつわりがただちにははっきりするからである。」

「『好太王の碑』などを引用してこれより神功皇后三韓征伐という学問上ははっきりと否認されているうそを根拠づけて盛んに軍閥主義を鼓吹している。」

「(公地公民の時代の)國は貴族と天皇の國であって人民はただ彼等を養うに過ぎなかったということをはっきりさせなければならない。これにより、現代において『国有』が本當に正しく人民の幸福のための国有となるとは、本當の人民の國から作らなければならないことは、おのずから明らかになるう。」

「(大仏や東大寺のために) 人民の飢餓、窮乏の勢はぐんとました。それを利用して東大寺らは多くの奴隷を買い込みまた人民の土地も奪って領地を広げた。奈良文化とはこうした人民の血と涙と汗でつくったもので、暗い、重苦しい文化である。」

「要するに蝦夷を植民地として支配したのがいわゆる『同化』で、このことは戦前朝鮮や台湾を『同化』したというのと同じ意味のことである。」

「『平等院が出来た頃、奥羽で安倍氏がそむき』とあるのは、植民地として支配された奥羽の蝦夷人の獨立運動である。」

「武士が『国民の中心となって世の中を導いていった』というのは、ファッショ的な『指導者』原理である。(略)『みちびく』のではない、支配するのであり、人民から年貢をしぼるのである。」

「人民のちからが盛り上がって一揆に發展する。それは『世の中がだんだん騒がしくなる』ことにされている。本年(一九四七)の元旦、吉田首相は労働運動を『不逞』な運動といったが、その立場が本書の民衆に関する叙述にはかならずあらわれてくる。」

「江戸時代の農村が『自治を許されていた』というのは戦争中の部落常會が『自治を許されていた』というのと同じである。」

「日本の人口は明治のはじめまで少しも増えなかった。わが日本人民は、滅

亡か革命かの二途に立ったとき、断乎として革命の道を選んだのであった。」

「『農民の気持ちもすさんできました』とある。これは本年元旦の吉田首相の生活のために戦う労働者を『不逞』とよんだのと同じである。」

「(安藤昌益について) すべての人が働き、搾取のない社会、わが国民もこうしたもっとも進んだ社会をたとえ空想においてではあれ、一八世紀にはついに描き始めたのである。」

「実は五條誓文は維新政府が封建主義に対する人民革命の裏切りの宣言にはかならない。」

「(日清戦争) 日本資本主義がすでに外国を植民地として奪おうとする要求をもってきた。また戦争によって国内の不安を外へそらすこと、これは明治政府成立早々からの征韓論の実現である。」

「(日露戦争) すでに日本勤労人民は、侵略戦争に反対し、非戦論をあらゆる迫害に抗してとなえたことを特筆せねばならない。」

「(朝鮮併合) 日本の朝鮮併合を『相談した結果』と書いてあるが、(略) その『相談』はたとえばピストルをもった大男が何も持たぬ少女と『相談』の結果その金を『もらった』というようなものである。」

「一九二二(大正十一)年七月、日本の労働者階級はついにその前衛の党日本共産党を生み出した。」

〔座談会「くにのあゆみの検討」(1947)〕³³⁾

羽仁五郎「建武中興は反動的な謀略であった、ということをはッキリ書くべきだね。」

「山城国一揆とか堺の問題は隠匿しているんだね。日本歴史の上で最も美しい堺の自由都市を書いていないのは、国家的な誇りを持っていない人が書いたとしか思えない。」

「五人組というのは苦しみ合う組織であった。(笑声) これは隣組の組織がおたがいに助け合って、共産党なんかにならんように取締る組織であるということと非常によく似てるんだ。こういうことは国民教育上非常に有害だナ。と同時に困るナ。」

「封建制度というものが、商業資本かなにかで腐って、ぐずぐずとくずれ、もちきれなくなって明治維新になったという、これは腐敗史観だね。」

井上 清「明治維新のことは、現在の民主主義革命の直接の先駆的な革命という意味で十分に検討しなければならない」

藤間生大「初めに五箇条の御誓文を出して、終りに一月に詔勅が出ていますね。天皇で近代史が始まり、そうして終わると。天皇中心主義のすばらしい現れが出ると思うんです。」

ここでは、天皇中心史観への批判的視点、人民の立場・階級的視点の欠如、世界史の発展法則と必然性の理解について繰り返し表明され、その上で、以下にみるような、変革志向型歴史教育の立場からの容赦ない全面的否定論が展開されていたのである。

「天皇制護持の歴史の教科書であることが断言できる」(伊豆公夫)³⁴⁾

「『超』の字のみを除いた國家主義であり、貴族主義である」(林屋辰三郎)³⁵⁾

「制限君主制あたりでしょう。」(新村猛)³⁶⁾

「『くにのあゆみ』ではなく、皇室の歩み、支配者のあゆみであった。」(井上清)³⁷⁾

「『くにのあゆみ』であって、『人民のあゆみ』ではない」(羽仁五郎)³⁸⁾

「支配階級の階級的な立場からのみ見ている。」(小池喜孝)³⁹⁾

(3) 中等国史教科書編纂委員会の設置から検定教科書の登場に至る時期

『くにのあゆみ』批判を展開した変革志向型歴史教育からは、その後、数人が、文部省内に設置された新制中学校用日本史教科書作成のための「中等国史教科書編纂委員会」委員となり、この委員会の中で、生活志向型歴史教育や事実志向型歴史教育の立場とともに、戦後の新しい社会科歴史教育の論理と記述についての論議がなされることになる。⁴⁰⁾

そしてまた、この議論においても、次に示されるように、引き続き、変革志向型歴史教育の立場に立った歴史叙述の採用が、強く迫られることになったのである。⁴¹⁾

〔座談会「歴史教育の諸問題(上)」(1958)〕⁴¹⁾

尾鍋輝彦「たとえば、二十三年から四年にかけての教科書編修の時に、まだ審議しないうちから最後の頁は人民広場の図を入れましょう、というような議論が出ている。それから明治維新のところを薩長の軍隊が小御所を囲んでいる。まさに、クーデターのその図をひとつ考えて入れましょう。極端な例をあげるのですが、そういう雰囲気というものがあったのです。」

他方で、以下にみられるように、『国民の歴史』『歴史教育』を中心とした国家志向型歴史教育や事実志向型歴史教育、⁴²⁾ および柳田国男や和歌森太郎を中心とした生活志向型歴史教育もまた、各々の歴史教育論を公表していくことになる。⁴³⁾

〔座談会「終戦後十一年を顧みて」(1956)〕⁴²⁾

岡田章雄「あの頃の一方に『国民の歴史』という、丸山国雄さんが中心になって出した雑誌がありました。あれは日本史だけでなく、世界史も含めた一般向きのものでした。新しい歴史教育の問題もあつかったものです。」

豊田 武「羽仁五郎氏が出された『人民の歴史』と歴研でやった天皇制の歴史、これが津田さんと対立する形で出てきていたですね。」

1) 変革志向型歴史教育の動向

中等国史教科書編纂委員会の教科書原稿は、結果的に、公表されないまま編纂作業を収束するのだが、この時期、変革志向型歴史教育の立場からの時代区分論、歴史教育内容論が、文部省から出される文書や1951年度版学習指導要領の社会科歴史の中に一定程度反映されることになった。

また、高橋の次の論考に代表されるように、編纂委員による、具体的内容論に即した主張がみられるようになるのも、この時期の特徴である。⁴⁴⁾⁴⁵⁾

〔高橋 一「明治維新の学習指導」(1948)〕⁴⁴⁾

「彼等（生徒）が自らの生活環境たる学校において『明治維新』をおこしているかどうか、反動的な学校幹部や教員のためにその活動がくじけてしまうことがないか、明治維新の反革命を知った彼等の経験が、その際どのように生かされているか。生徒の団結は固いかどうか、こうして生きた、そして生かされた明治維新史こそが、彼等の学習効果判定の資料とされるのではなくてはならない。そうすることによって教師自身もさらに明治維新を自らの歴史とすることが出来るであろう。」

〔高橋碩一『新しい歴史教育への道』(1949)〕⁴⁵⁾

「彼等の家庭生活を通じて、親子の間に、両親の間に、兄弟姉妹の間に家族制度の中に、彼等はそこに封建的なもの、奴隷制的なものすら感じ取っている場合が多い。」

「歴史教育においてはやはりその根本において原始社会から奴隷制、封建制を経て資本主義社会に至りさらに社会主義社会に進みつつある発展に応じてその単元が置かれるべきであると考え。歴史の基本的方向を無視した歴史教育はあり得ないからである。」

いずれも、基本的には階級闘争史観の適用の域を出るものではなかったといえようが、さらに、変革志向型歴史教育は、事実志向型歴史教育への批判的論評⁴⁶⁾だけでなく、当時、最も社会科に接近して社会科歴史論を展開していた、生活志向型歴史教育に対しても厳しく批判を加えていった。

次の伊豆の発言は、家永三郎批判を通して事実志向型歴史教育を批判したものであるし、さらに、松島栄一以下の諸論は、生活志向型歴史教育に位置する和歌森太郎を批判するものとなっている。

とりわけ、和歌森への批判の中には、あからさまな政治主義的批判がみうけられることに留意しておきたい。⁴⁷⁾⁴⁸⁾⁴⁹⁾

[伊豆公夫「警戒すべき実証論」(1948)]⁴⁶⁾

「(家永氏の批判する)一派が唯物史観学であり、『研究者』が藤間生大・石母田正君らであることは、その問題に関心をもつものにはすぐ察しがつくであろうが、唯物史観に対する廣範な不信の念を植えつけようとする意図に出ているのではないかとおもわれる。」

「(実証主義は)『事実! 事実!』というばかりで、その事実をわれわれがいかに理解すればよいかについて教えをこうと、なっとくゆく答をあたえてくれたためしはないのである。」

「政治から独立しているはずの『実証論』が、最近あくどい反民主主義的政治論をさかんに展開された」

「歴史学の進歩にとって警戒すべきはまさにこの種の『実証論』である。」

[まつしまえいいち「民俗学の性格について」(1948)]⁴⁷⁾

「現在の民俗学の方法論の未確立は、必然的にブルジョワ『社会学』を近接せしめているのではないか、ということです。」

[野井康輔「三つの歴史教育論」(1951)]⁴⁸⁾

「民主主義の仮面をかぶって、反動勢力に迎合しようとする反人民的な歴史教育への警鐘の方が必要だと思う。」

「『斗争によって日本民族の幸福がどれ程保障されるか未だ決めがたいのではないでせうか』に至っては、(和歌森)氏の歴史学者としての地位を疑わずには居れない。」

[松島栄一「書評 歴史教育の確立と前進」1953]⁴⁹⁾

「歴史教育の一面のみが重視され、歴史教育技術論におちいるかぎり、このままでは、和歌森氏がもっともおそれる、教育をついに反動の手にわたし、祖国をほろぼすにいたることになるであろう。」

「和歌森氏たちの言葉は、すでに敬愛する両氏が教育権力の側にたっていることをしめしている。」

[矢野寛「書評 歴史教育の確立と前進」(1953)]⁵⁰⁾

「歴史に対する考え方の基本的なちがいから進歩的歴史教育と別れて一步退こうとしていることがわかる。」

「この著者たちの主張の中に散在するものを承認するまえに、一見良心的な

態度に偽装されている危険な考え方を指摘しなくてはならぬ。」

2) 国家志向型歴史教育と事実志向型歴史教育の動向

中等国史教科書編纂委員会が開催されていた時期、国家志向型歴史教育と事実志向型歴史教育とは、いずれも変革志向型歴史教育からの批判⁵¹⁾を受け続けた。このような中で、両者の、いわば、合同のテーブルとしての機能⁵²⁾を果たしたのが雑誌『国民の歴史』である。

〔林基「『くにのあゆみ』をめぐって」(1957)〕⁵¹⁾

「『くにのあゆみ』『新しい日本の歴史』に続いて文部省の日本歴史歪曲の第三軍として現れたのが、雑誌『国民の歴史』（実業之日本社）である。」

「(丸山国雄は)軍国主義者超国家主義者として最近文部省図書監修官の職を追放せられた札付の人物ではないか。この人物が今日堂々と多数の部数を発行する『国民の歴史』の主幹として編輯を主宰し、あまつさえ、同誌に『歴史教育の方針』と題する大論文を執筆し、今日の日本の歴史教育に重大な影響をあたえようとしているに至っては、善良なる日本人民な眉をなで鼻をつままざるを得ないだろう。」

この時期以降、国家志向型歴史教育は、占領期の終了、戦前以来の雑誌『歴史教育』の復刊、検定教科書の発刊、等々の経緯の中、次第に、その立場を鮮明としていくことになる。国家志向型歴史教育は、歴史教育の社会科からの独立を求める主張とともに、政治的・感情的反発を含みつつ、⁵³⁾⁵⁴⁾津田や坂本の問題提起を支柱として、⁵⁵⁾⁵⁶⁾⁵⁷⁾社会科歴史=唯物史観との批判を展開していくのである。⁵⁸⁾

〔今井登志喜「SYMPOSIUM 歴史教育と社会科」(1949)〕⁵³⁾

「ソ連が果たして搾取なき社会といえるものであるか断じて否である。」

「ソ連における日本人捕虜をもって世界の奴隷史の大きい一頁であると考えている。」

〔滝川政二郎「速やかに歴史科を設置せよ」(1953)〕⁵⁴⁾

「社会科の歴史の時代区分が、原始時代、奴隷時代、封建時代、近代（資本主義時代）となっていて、現代が必然的に社会主義時代に移ってゆく過渡期であるように教え込もうとしているのは、日本占領当時総司令部にきていたアメリカの官吏の中に容共主義者が多かったことの名残である。」

「満州にいた日本の共産主義者はみなソ連のためにひどい目に遭わされた。」

「日本人であることはわれわれの宿命である。日本の国家が強盛に成ならない限り、われわれに幸福はないというのが私の信念である。強盛になって

他民族に君臨しようとは思わないが日本民族の母体である日本婦人に春を売らせなくても国が立ってゆける程度に強盛になりたい。」

「私は社会科の即時廃止と歴史科の即時復活とを提唱する。」

「日本を弱体化し、日本を懲罰せんとした占領軍政府の尻馬に乗って、読めば読むほど日本が嫌になるような歴史を書いた歴史家達も、いつの日か必ず追放の憂目に遭う日を覚悟しなければなるまいとおもう。」

「社会科の外に歴史を教えないという現在の制度は、歴史教育を抹殺するものであって、民を愚とする制度であると云わねばならない。」

「マルキシズムを宣伝する意図を持った歴史家は、歴史科の教壇に立つ資格はない。民主主義を宣伝する意図を持つ歴史家また然りである。」

[つださうきち「日本歴史の取扱ひについて」(1952)]⁵⁵⁾

「過去の日本の婦人がみな家族制度の重圧に堪へかねて断えず苦痛を感じてゐたと思うならば、それは事実を知らないものである。」

「特殊のイデオロギイといふものをもってゐる人の思想が、そのイデオロギイに強く制約されて自由を失つたものであることは、いふまでもあるまい。」

[つだちうきち「歴史教育の主要問題」(1953)]⁵⁶⁾

「今日の国民生活の内面にはその遠い昔からの絶えざる国民の生命が動いてゐる。」

「有名人の仕事のうち無名人の仕事が含まれてゐるのである。」

「日本の過去の国民の行動とその生活とは、全体から見て今日の国民が誇りとすべきものであり、それに対して感謝すべきものである。」

「日本を含めて世界のいろいろの民族や国民の同じ時代の状態を一所にまとめて同時代のこととして排列し、その間に外観上何らかの関係があるが如く装ふのは、歴史の教科としては全く意味がないのみならず、歴史の本質に背くものである。」

[坂本太郎「歴史教育私観」(1953)]⁵⁷⁾

「今日の歴史教育で私どもの一番不満に思うことは歴史が独立の教科として扱われず、社会科の中に包含せられ、社会科歴史としての限定をうけてゐるところである。」

「唯物史観的な立場による時代区分にもとづいて、各時代の社会組織や社会生活・経済生活・経済状態などを主として叙述するのである。」

「人生経験の宝庫、人間愛の参考書という意味に歴史を見ることは、今日もなお生きている歴史の実用的価値の一つであろう。」

「要するに社会科歴史からは不当に埋没された個人を掘出さねばならぬ。人間性の全き恢復がなされねばならぬと私は信ずるのである。」

「その国に生まれて、その国の神話を知らないということは、不幸なことであるまいか。」

〔歴史教育 1-1 復刊号 歴史教育研究会 日本書院 (1953)〕⁵⁸⁾

名越時正「高校生と日本史」

「千早城，松下村塾，本居宣長，西郷隆盛等については教えられていないのか，甚だ出鱈目な知識しか持っていないのである。これらの調査によって知り得たものは国の歴史を尊重して現実の日本及び自己の立場を考え将来の発展を思うものは極く少なし，その反対に過去を軽蔑憎悪するか，もしくは現代に関係のないことと切り離れた上で憐れんでいるのである。」

「原始社会，古代社会，封建社会，近代社会の発展段階説を基にした」時代区分は「共産主義社会の革命のために歴史を利用するものと考えられても弁解できないであろう。」

森田康之助「破壊された国史教科書」

『学習指導要領』に於いて文部省の指導し要求しているのは唯物史観を基礎とした日本歴史であり，“共産社会”へと傾斜しているものとして『現代』を把握させようと意図していると云われてもいたしかたないのではあるまいか。(略)そしてその結果は云わずと知れたこと，国際共産主義思想の絶好の温床，培養国となるだけである。」

このような過程で，特に注目しておきたいことは，事実志向型歴史教育の立場から，変革志向型歴史教育に対する批判⁵⁹⁾だけでなく，国家志向型歴史教育への批判的姿勢⁶²⁾⁶³⁾が見られるようになった事実である。

〔家永三郎「SYMPOSIUM 歴史教育と社会科教育 批判2」(1949) ⁵⁹⁾〕

「歴史教育と政治的宣伝との厳密なる区別の必要を力説したい。」

「歴史を何等かの一義的理念乃至法則によって単純に図式化しようとする試みは過去にもいろいろあり，現在も有力であるが，それらは何れとして歴史現象の一面的抽象的でないものはなかった。」

「単一の実践的態度のみを公定して他を弾圧し，したがって単一の歴史的世界像のみを被教育者に強制するがごとき独裁主義歴史教育はかつての神国史観教育の再来にあらずして何であろうか。」

〔井上光貞「津田博士の歴史教育論について」(1953)〕⁶⁰⁾

「博士に対して根本的に反対である第一点は，博士が社会科歴史の目標とす

る民主主義の思想に対して全然反対であるらしい点である。」

「(津田の) 民主主義の本義をも否定しようという考えには全然同感できない。」

「博士が封建的なものの語義がはっきりせず、何が封建的だかあいまいだといわれるのは、民主主義の思想の上に立ってられない以上当然であり、また封建的なものを否定すれば無限の混乱に陥ると妄想されるのも、それに代わるべき民主主義を認めてられないためである。」

「私は皇室が国民統一のかなめとして存続してきたことを事実としてほぼ認め得ると思うし、民衆が卑近な意味において歴史を動かしてきたともおもっていない。しかし、民衆が歴史を動かしてきたのであろうがなかろうが、民衆が過去にどのような生活を送ってきたかを歴史の中心として語るということはあくまで正しいとおもう。私は皇室中心、偉人中心の歴史には反対である。」

〔家永三郎「1953年度の歴史学界 日本史」(1954)〕⁶¹⁾

「九月に、雑誌『歴史教育』が再刊されたが、その発刊趣意書の中には戦争中枢的な地位にあって狂信的な日本史学を鼓舞していたある有名な国史学者の名が堂々とつらねられている。この学者は、戦争中軍の権力と結託して不義の戦いを煽動し、数百万の無辜の同胞を死地に駆った重い責任を負わねばならぬ筈であるにもかかわらず、戦後自己の戦争中の行動に対して少しも反省の色を示すことなく、最近においては、時勢の再転廻に便乗してふたび露骨な挑発的態度をとるに至っているのである。かかる経歴の持ち主が、往年の悲劇のまぢまぢ再現されようとしている今日、事もあろうに歴史教育を説こうとするに至っては、我々の肌を粟を生ぜしめるに十分であろう。狂信的日本主義史学の再建を企劃しつつある形跡が、明瞭に看取されているのである。『歴史教育』は『歴史教育研究会』の編集となっているが、『歴史教育研究会』は別に同じ発行所から検定日本史教科書『高等日本史』を編集し、検定通過に成功した。

その内容をみると、あるいは封建的家父長家族制度を賛美し、あるいは無産階級の解放運動を非難し、あるいは、再軍備の必要を強調するなど、随所にその反動的色調を大胆に露出しているのである。すでにファシズム史学復活の機運が日本史学の内部に醸成せられつつある傾向を認知するには十分であろう。」

事実志向型歴史教育は、このように、国家志向型や変革志向型歴史教育の立場との違いを表明しつつ、他方では、生活志向型歴史教育については、これに、一定の理解を示すようになるのである。⁶²⁾

〔岡田章雄「二つの歴史教育論」（1951）〕⁶²⁾

「（高橋の）著書の主眼となっているところが、歴史教育は政治教育でなければならぬという点にあることは注目に値する。これでは終戦前の歴史教育と大差ないことになろう。国体護持の精神をうえつける代りに、人民革命への興奮を湧きたたせる目的に歴史教育が利用されていたのではこれもまた和歌森氏のいわれている祖国主義的歴史教育の変態に外ならない。生徒はいつまでたっても浮かばれないわけである。」

「（和歌森は）歴史教育を政治の道具から解放しようと努力されている。

新しい歴史教育の確立のためにつくされている努力は敬服にたえないが、『経験としての歴史』として民俗学が多少過重にとりあげられている点や『展望としての歴史』の中に、とくに日本史と世界史との関係において、（余論世界史教育における諸問題）政治教育的な色彩がこくのこされている点など、気になるところがないでもない。」

（4）本論の成果と課題

以上、本論においては、敗戦前後から1950年前後にいたる、4つの歴史教育の動向と相互の位置関係に焦点をあてて整理した。

冒頭で述べたように、本論の目的は、社会科成立期における歴史教育の動向を類型化し、それぞれの特色を比較、整理することにあつた。そして、この作業は、同時に、戦後の歴史教育を、占領期における政治的対立や政治的構図の中で、おもに左右両極の歴史教育を対比的に描くことによって説明しようとしてきた、これまでの論潮⁶³⁾に修正を加えようとする作業をも、その内に含み持つものとなっている。

本論では、社会科成立期における歴史教育の形成過程について、これに、複線型の系譜的・対比的な整理および分析を加え、概括的ではあるが、戦後の出発点における歴史教育の複眼的な構図を、一定程度明示することができたのではないかと考えている。

注

- 1) 「社会科成立期における歴史教科書の作成と4つの歴史教育（Ⅰ）」『鹿児島大学教育学部実践研究紀要』5号 1995. 11
「社会科成立期における歴史教科書の作成と4つの歴史教育（Ⅱ）－「国家志向」型歴史教育の系譜と特色－」『鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編』47巻 1996. 3
- 2) 四つの歴史教育論として分類しているわけではないが、複数の要素を「くにのあゆみ批判」の中に見出し、整理、分析したものとしては、片上宗二『日本社会科成立史研究』（風間書房 1993年）がある。
- 3) 家永三郎「戦後史における教科書裁判」『歴史地理教育』248号 歴史教育者協議会 1976.3 21～22頁
- 4) 高橋碩一「くにのあゆみをめぐって」民科『科学年鑑』1947

- 5) 家永三郎「『くにのあゆみ』理解のために」『日本読書新聞』369号 1946.11.13
- 6) 家永三郎「警戒すべき非実証論」『文理科大学新聞』1948.3.15
- 7) 家永三郎「戦後の歴史教育」『岩波日本歴史別巻1』1963 326頁
- 8) 家永三郎「『くにのあゆみ』編纂始末」『教科書の歴史』唐澤富太郎 創文社 1956 624頁
- 9) 松島栄一「戦後における文教政策の変質過程-」『社会科教育体系 第三巻』三一書房 1963 224頁
- 10) 丸山国雄『新国史の教育-くにのあゆみについて-』惇信堂 1947.9 74~234頁
- 11) 宮下三七男「新歴史教科書の編纂趣旨と取扱」『文部時報』835号 1946.12.10 16~17頁
- 12) 「終戦後十一年を顧みて」『日本歴史』第100号 日本史研究会 1956.10 22頁
- 13) 座談会「戦後の高校日本史教育の歩み」『日本史の研究』第100号 1978.3 45頁
- 14) 森末義彰「書評欄」『国民の歴史』1-2 1947.2 95頁
- 15) 座談会「くにのゆみの研究」『朝日評論』2-3 1947.3 32~64頁
- 16) 「国史の副読本を同様の意図を持って編纂」した、とする林基の指摘(林基「『くにのあゆみ』をめぐって」『歴史評論』民主主義科学者協会 1947.6)
- 17) 『新しい日本の歴史』(第一巻)毎日新聞社 1946.11 89~104頁
- 18) 同上 45~55頁
- 19) 林基「『くにのあゆみ』をめぐって」『歴史評論』民主主義科学者協会 1947.6 3頁
- 20) 同上 3頁
- 21) 遠山茂樹・松島栄一「國史教育座談会報告」『歴史学研究』122号(復刊1号)1946.6.20 49頁
参加者は伊東多三郎, 豊田武, 竹内理三, 石井孝, 渡辺義通, 信夫清三郎, 高橋碩一, 渡辺省三, 米田貞一郎, 高橋巖, 近藤寿樹, 調所武夫, 間瀬正次, 羽生敦, 大和英成, 黒板伸夫, 有本実, 山口啓二, 元木光雄, 山口裕, 大江匡輝, 林幹彌, 野澤康, 後藤淑, 桜井晴彦, 大田恭二, 西村希一, 吉田五郎, 今野伸一, 並木正雄, 高木久, 高橋定実, 田中健夫, 富来隆, 村田静, 藤間生大, 林基, 石母田正, 井上清, 桃裕行, 富地治邦, 遠山茂樹, 松島栄一
- 22) 田中武雄『高橋碩一著作集 第五巻』あゆみ出版 1984.8 314頁
- 23) 加藤章「戦後歴史教育の出發と社会科の成立」『講座歴史教育1』弘文堂 1982 285頁
- 24) たとえば, 安藤良雄「民主主義革命と日本歴史教育の革新」『潮流』1-2 1946.2 「先づ正しい歴史發展の法則が教へられなければならない。即ち, 人間の社會は常に静止することなく一つの法則-それは究極に於ては何れの時代何れの國に於ても適用される-に基いて發展するものであることが教へられなければならないのである。」(88~90頁)
- 25) Trainor Collection Box No.73, The Scientific Study of Japanese History, October 22 1945 国立教育研究所蔵
- 26) 井上清「時評」『歴史学研究』122号 1946.6 34~40頁
- 27) 高橋碩一「くにのあゆみをめぐって」『民科 科学年鑑』1947 133頁
- 28) 同上, 138頁
- 29) 井上清「歴史教育について」『世界』8 岩波書店 1946.8 71~74頁
- 30) 藤谷俊雄「歴史教育と歴史観」『日本史研究』5 1947.9 57頁
- 31) 阿部眞琴「歴史教科書への提案」『あかるい教育』(『あかるい学校』改題)9号 民主主義教育協会 1948.4. 17~18頁
- 32) 井上清「くにのあゆみ批判-正しい日本歴史-」解放社 1947.6
- 33) 座談会「くにのあゆみの検討」朝日評論2-3 1947.3 50~63頁
- 34) 伊豆公夫「編纂方法に関する総括的批判」1946.12.21
自由座談会, 「くにのあゆみ」を検討する人民新聞社出版部 1947.4 (『社会科教育史資料4』東京法令 1974 115~117頁)
- 35) 林屋辰三郎「『くにのあゆみ』小論」『日本史研究』5 1947.9 58頁
- 36) 座談会「歴史教育批判」『日本史研究』5 1947.9 65~66頁
- 37) 井上清「『くにのあゆみ』批判」『潮流』1947.2 123頁
- 38) 座談会「くにのあゆみの検討」『朝日評論』2-3 1947.3 51頁
- 39) 同上座談会, 『朝日評論』2-4 1947.4 66頁

- 40) 編纂委員会をめぐる考察については拙稿「戦後の歴史教育と社会科教育」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』40巻 1989. 3, および, 拙稿「中等国史教科書編纂委員会の歴史的研究(研究ノート)」『社会科教育研究』70号 日本社会科教育学会 1994. 3
- 41) 「歴史教育の諸問題(上)」『日本歴史』123号 1958. 9
- 42) 「終戦後十一年を顧みて」『日本歴史』100号 1956. 10
- 43) 生活志向型歴史教育については拙稿「社会科歴史論の歴史的研究」『上越社会研究』1号 1987. 10, および, 拙稿「戦後の歴史教育と社会科教育」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』40巻 1989. 3, 拙稿「歴史教育独立論と『社会科歴史』論」『史潮』第22号 歴史学会 弘文堂 1987. 11, 拙稿「初発期における『社会科歴史』教科書の具体的分析」『社会科研究』第37号 全国社会科教育学会 1989. 3, 拙稿「GHQ 占領政策後期における日本史教科書」『史潮』新35号 歴史学会 弘文堂 1994. 6, 拙稿「初期社会科における新制中学校「一般社会科」の歴史学習」『社会系教科教育の理論と実践』清水書院 1995. 3
- 44) 高橋碩一「明治維新の学習指導」『国民の歴史』2-9 1948. 9 65頁
- 45) 高橋碩一『新しい歴史教育への道』誠文堂 1949. 7 143~144頁
- 46) 伊豆公夫「警戒すべき実証論」文理科大学新聞 1948. 5. 20
- 47) 「往復書簡」『国民の歴史』2-9 1948. 9 59頁
- 48) 野井康輔「三つの歴史教育論」『日本史研究』14号 1951. 10 54頁
(同様の主旨の書評に長谷川浩司「歴史教育の問題点-三つの歴史教育論を通して-」『時事通信 内外教育版』第197号 1950. 2. 28がある。)
- 49) 松島栄一「書評 歴史教育の確立と前進」『教育』3-5 1953 47頁
- 50) 矢野寛「書評 歴史教育の確立と前進」『歴史評論』歴史科学協議会 45号 1953 84~85頁
- 51) 林基「『くにのあゆみ』をめぐって」『歴史評論』民主主義科学者協会 1947. 6 4頁
- 52) 『国民の技師』(主幹)丸山国雄, 大久保利謙, 森末義彰, 井上知勇, 岡田章雄, 沼田次郎, 次田青澄 (『国民の歴史』創刊号「国民の歴史」研究会 実業之日本社 1947. 1. 1による) (評議員)板澤武雄, 今井登志喜, 江上波夫, 大類伸, 高坂正顕, 小葉田淳, 坂本太郎, 辻善之助, 中村孝也, 長谷川如是閑, 原随円, 久松潜一, 宮崎市定, 村川堅太郎, 森克巳, 柳田國男, 山中謙二, 龍肅, 和田 , (編修委員) 岡田章雄, 大久保利謙, 丸山国雄, 百瀬弘, 森末義彰, 和歌森太郎 (『国民の歴史』2-4. 1948による) 「国民の歴史」に掲載された主な論者 森末義彰, 岡田章雄, 大久保利謙, 坂本太郎, 丸山国雄, 三上次雄, 竹内理三, 辻善之助, 大類伸, 遠山茂樹, 齋藤忠, 塩田嵩, 柳田国男, 富田義雄, 深谷博治, 和歌森太郎, 井上光貞, 青木誠四郎, 阿部眞琴, 家永三郎, 豊田武, 高橋碩一, 小西四郎, 松島栄一, 肥後和男
- 53) 今井登志喜「SYMPOSIUM 歴史教育と社会科 批判4」『教育』世界評論社 1949. 6
- 54) 滝川政二郎「速やかに歴史科を設置せよ」『歴史教育』1-4 1953. 11 10~15頁
- 55) つださうきち「日本歴史の取扱ひについて」『日本歴史』44 1952. 1 3~4頁
- 56) つださうきち「歴史教育の主要問題」『歴史教育』1-2 1953. 10 3~8頁
- 57) 坂本太郎「歴史教育私観」『歴史教育』1-4 1953. 11 3~5頁
- 58) 『歴史教育』復刊号 歴史教育研究会 日本書院 1953. 9 59~66頁
- 59) 家永三郎「SYMPOSIUM 歴史教育と社会科 批判2」『教育』世界評論社 1949. 6
- 60) 井上光貞「津田博士の歴史教育論について」『歴史教育』創刊号 1953. 9 69~72頁
- 61) 家永三郎「1953年度の歴史学界 日本史」『史学雑誌』63-5 1954 1~2頁
- 62) 岡田章雄「二つの歴史教育論」教育大学新聞 1951. 1. 20
- 63) たとえば, 遠山茂樹『戦後の歴史学と歴史意識』(岩波書店 1968), 佐藤伸雄『戦後歴史教育論』(青木書店 1976), 歴史教育者協議会編『あたらしい歴史教育6』(大月書店 1994)